

15の春を探して

動き出した高校改革

作業着姿の生徒たちが高圧電流の変圧器操作を学ぶ実習棟。その一室で2年生7人が、大学入試センター試験の過去問題に向き合った。「電気実験をする君たちなら、普通科のように公式に頼らなくても解けるはず」。指導する京都大学大学院准教授の言葉に生徒たちは顔を合わせた。

難関大学の工学部進学を掲げ、洛陽工業高(京都市南区)が今年新設した「ハイパスステージ」の授業が13日始まった。7人は、1年から選択の「リーダー養成講座」と合わせ、ほかの電気科の生徒と比べ毎週4時間多く授業を受ける。

工業高で大学進学熱が高まり、全国の進学率は5割に迫る勢いだ。伏見工業高(伏見区)は5年前、進学特化のコースを設置した。1986年設立と日本最古の工業高で、「洛陽ブランド」と評される

特別授業で普通科と競争

⑤ 工業高に進学熱

技術で製造業を支えてきた洛陽工業高も流れに加わる。これまで、工業高からの進学といえは、工業技術を生かせる、私立大や地方の国立大の推薦入試を指した。洛陽工

技術備え社会で強みに



「いろいろな視点で物事を考えることが、面白い」。合格者説明会で、リーダー養成講座での経験を語る生徒たち(3月19日、京都市南区・洛陽工業高)

撮影・船越正宏

工業高の進学率 京都市立工業高2校の今春の卒業生でみると、大学と短大・専修学校への進学率は、伏見工業高が39%、洛陽工業高が22%となった。両校合わせて31%で1994年度と比べて12ポイントアップしている。

高はあえて、普通科の生徒と競い合う道を選んだ。ただ、受験指導にはカリキュラムの制約が壁となる。実習中心の必修工業科目は週10時間に上る一方、英語は普通科の半分のない大学を志望したが、

「ごめんね」。恩田徹校長は1月のセンター試験の2日後、廊下で男子生徒に声を掛けた。浪人覚悟で、推薦枠のない大学を志望したが、

恩田校長が育てたいのは「知識と技術を兼ね備え、社会で役立つ理系人間」。企業が注目する半導体の実験で科学や数学を横断的に学ばせる。講演や討論で幅広い視野を養う「リーダー養成講座」

には世界有数の京都企業の幹部をそろえた。入学前は就職志望だった2年の細見昌希君(16)は「大卒の就職ならいろんな選択肢がでさそう」と未来を描く。

「全国での勝負を経験させ

たい」(恩田校長)と参加した1月の全国模試。細見君は英語で完敗だった。「長文は分からない単語ばかり」。参考書を毎晩開き、単語を声に出してつづりを書くようになった。ハイパスステージで英語は週1時間増え、放課後の進学補習も本格化する。「頑張れば伸びる」と自分に言い聞かせる。

京都市教育委員会の有識者委員会で、企業側の委員は、昨年タイに自動車部品の生産拠点を設けたことに触れ、「グローバルな視野を持てる人材の育成を重視すべき」と訴えた。中小企業も、技術一本でなく幅広い能力を持つ人材を求めている。「普通科の生徒にない付加価値が、社会では強みになる」と恩田校長は力を込める。

新入生に向けた3月の説明会で、ハイパスステージに参加する生徒たちは、壇上で「エネルギー開発で起業したい」と将来の夢を語った。生徒や社会の変化に呼応して、学校現場は手探りで動き始めた。

おわり